

「ガキ大将がいた時代の遊び」を復活させよう！ ～すべては子どもたちの笑顔のために～

みうら小児科医院・院長 三浦 義孝

昭和29年3月生まれの私が小学校に入った頃は、まだガキ大将がいた時代でした。ガキ大将に統率され、町内の路地裏や空き地に集まり、いろいろな遊びに熱中しました。遊び道具は年長の子のを見て自分で工夫し、メンコやクギ遊び、ビーダマなど、暗くなるまで一生懸命遊んでいました。時には危険な遊びもりましたが、その遊び集団の中で、自分のいたらない部分に気づいたり、「相手を思いやる心」「いたわる心」「我慢をする心」が知らず知らずのうちに身についていったように思います。そうしたガキ大将も、私が小学6年生になる頃には居なくなっていました。Sケンなどのちよつとした体と体のぶつかり合いがある遊びも、ハラハラ、ドキドキするような遊びが取りあげられていきました。ですので、私は昔な

がらの「子ども社会」の最後の時代を過ごしたと思っています。親たちもまた、おとな社会と子ども社会に一線を画し、あまり立ち入ることもしなかったように思います。子ども社会には、おとな社会と違う、子どもたちの集団のルールがあったのです。



今の子どもたちをとりまく環境は、言うまでもなく、仲間との集団遊びや外遊びが難しい状況です。こうした人や自然との直接体験が少なくなっていることは、前述したような「思いやる心」や「我慢する心」を育む機会が失われていると

も言えます。さらに深刻なのは、塾通いなどにより友だちと遊ぶ時間が無くなり、テレビゲームや携帯型ゲーム機に熱中する時間が増え、生きた生身の人間とのつきあいがなくなっている状況です。最近では、携帯電話やスマートフォンも問題となっています。小児科医として子どもたちと接していても、あまり笑わなかったり、コミュニケーションが苦手な子ども、落ち着きがなかったり、同じ年代の子どもの中に入っていない子どもが目につきます。「思いやる心」や「我慢する心」よりも前の段階で、気持ちや心を開けない子どもたちが増えているように思えます。

言葉が出てこなかったり、

発語の遅い子どもたちを診るたびに、「母親は母乳を与えるときに、子どもの目を見て話しかけていたか。テレビを見たり、スマートフォンを触りながらではなかったか」などと、親のライフスタイルも心配になります。

私は、自分の子どもが小学生の時から、一緒にキャンプなどのレクリエーション活動に積極的に参加しました。初めてのキャンプでは、ペットボトルを使ってランタンを作

り、ロウソク2本持って夜の山に登りました。それだけでも、子どもたちにとっては冒険です。頂上に着くと星座が輝き、大人のリーダーが「夏の大三角形」を教えてくれました。ある野外活動では、西洋タンポポと日本タンポポの違いを学び、その後、タンポポを天ぷらにして食べたらしめました。どの活動も子どもたちを惹きつけ、楽しさによって心を開き、チャレンジすることを通して仲間と積極的にいかかり、達成感を得ていました。



いつの時代でも、人は人とかかわりの中で生きていきます。かつてのような集団遊びや外遊びがなくなり、生身の人間とのつきあいが少なくなってしまう今の子どもたちには、意図的に遊び仲間集

プロフィール

三浦 義孝
(みうら よしたか)

みうら小児科医院 院長。岩手県小児科医会会長、日本保育園保健協議会副会長、岩手医科大学小児科学講座非常勤講師。小児の事故防止、心肺蘇生法普及啓発、小児の健全育成活動に積極的に取り組んでいる。

団を復活させ、自然体験や社会体験を提供し、心を開き、相手を思いやる心や忍耐力を育む必要があると思います。仲間とのふれあいや、「できた！」という達成感を感じ、集団の中の自己肯定感を持つような遊びを提供することが大切です。そういう遊びこそ、「ガキ大将がいた時代の遊び」が有効なのです。少しくらいのスリ傷は大丈夫、思いきり遊ぶ子どもを見守る姿勢も大事です。今のお父さん、お母さんたちは、もう体験していないかもしれません。「昔の遊び」を知っている私の世代の大人たちが、もっと頑張らなければいけないのです。「すべては子どもたちの笑顔のために」です。

※図＝遠藤ケイ（こども遊び大全・新宿書房）より抜粋